

## 遠距離介護がら目立てくる子づくり親づくり

## パオッコ活動現場より⑤

NPO法人パオッコ ～離れて暮らす親のケアを考える会～ 太田差恵子

先日、ある行政機関の職員向け福利厚生セミナーに呼ばれ遠距離介護をテーマに話をしました。終了間際、50代くらいの女性が手を挙げられました。

実家の両親は老々認々介護だったそうです。あるとき親族が実家に電話してもずっと話中。それを聞き、女性は話中話中に問い合わせました。が、受話器があがっているのではなく電話機の故障の可能性が高いとのこと。結果は電話局の言うとおり電話機の故障。しかも父親は死亡していたとのこと。認々介護では、夫婦で暮らしていてもいわゆる「孤独死」のようなことが起こるのだとあらためて知りました。

実家は、ゴミ屋敷状態だったそうです。そのため、父親の死後、業者に来てもらって大量のゴミをすべて処分。そして母親は施設に。ところが、ここで問題が起きました。どうやらゴミの中に金融機関関連の大切な書類もまざっていたというのです(家庭用金庫があったのですが、それは使われていなかったそうです)。両親がどの金融機関にどれだけのお金を蓄えているのか分からなくなってしまうのです。不明のお金をどうやって発見するのかが、専門家に相談する必要がありますが、取り急ぎ母親に対して成年後見制度を利用することは必須に思えました。誰かが母親に代わって財産管理

をする必要があるでしょう。女性には「成年後見制度」という言葉を初めて聞いたようでハードルの高さを感じられた風でした。そこで、まず身近な社会福祉協議会の「日常生活自立支援事業」の担当者に相談することを勧めました。認知症高齢者、知的障害者、精神障害者等のうち判断能力が不十分な人が地域において自立した生活が送れるよう、利用者との契約に基づき、福祉サービスの利用援助等を行うものです。担当者であれば「成年後見制度」についても知っているはずなので情報提供してもらおうと言いました。

の場合も義母が急死したとき、銀行口座やキャッシュカードの在り処がわからず、義父が混乱していたことを思い出します。ひと昔前までは、顔見知りであれば金融機関が配慮してくれることもありましたが、現在は個人情報保護の観点で、家族といえども情報入手することは困難です。

女性の話は会場全体で共有されました。重い課題であるにも関わらず、オープンにされる女性に感心しました。どちらかというと実家がゴミ屋敷化していることや、大切な書類をゴミと一緒に処分したこと、親が孤独死したようなことは「恥ずかしいこと」と考え抱え込みがち。そうして、重荷を背負い過ぎて自身がうつになった家族をみることも珍しくありません。

しかし、いまの社会のなかでこういうことが起こるのは本人はもちろん、家族の責任でもありません。誰にでも起こりうることです。女性は言いました。

「私は、なんでも困ったことは

どんどん話すんです。そうしないと、なにも解決しない」。私は心からうなずきました。

困ったことが起きた場合、隠すのとオープンにするのでは結果は大きく違ってきます。

こんなケースを思い出します。やはり実家の両親の遠距離介護をしていた女性です。彼女はあっけらかんとしたほらかな性格。困ったことも、楽しかったことも、おもしろいことも、なんでも話す素敵な関西人。

両親は2人暮らしでした。父親は病気で入院。長引きました。

病院は長居させてくれないので、転々としていました。その間、徐々に母親もうつ状態になっていったのです。次第に、夫の入院する病院に行くことも拒むようになりました。

「母は父が病院を転々とする様子を見てつらかったのでしょう。父のことをかわいそうに思う気持ちもあつたんだと思う。同時に、父の行き場がなくなつて自宅に戻ってきたら、どうしよう、という不安も。管をいっばい付けた父を見て、とてもじゃないけれど自分の手に負えないと思つたのだと思います」

高齢の夫婦世帯では、配偶者の介護度が増していくことは、大きな不安になることは容易に想像できます。予測のつかない将来。自身も老いていくなか、「自分に介護できるんだろうか」という懸念。

「自分ひとりですべて全部するのは、という恐怖にも似た感覚かもしれません。」

離れて暮らす子世代の不安よりも、もっと深刻で差し迫った

ものであるでしょう。一方で、そういうことを口にするのは「ご法度」のような空気も。配偶者の介護をすることは当然のことという社会規範があるように思います。「見てあげたい」という切実な気持ちもあり、葛藤があるに違いありません。

そうこうしている間に父親が手術を受け、女性は20日ほど病院に泊まりこみました。母親の孤独感が増し、心身共に容態は一気に悪化。うまく歩けず、転ぶことも度々。手が震える。心の病だけでなく、パーキンソン病も発症したのです。

そのうち、母親はご近所など誰かれ構わず「私もどこかに入院したい」と言うようになったといえます。女性は、そういう状況であることを知り合いにも友人にも話していました。

すると、友人からこんな朗報が舞い込んできました。「夫が内装業者として入っている建物が、高齢者の施設らしい」

問い合わせると、開所を控えた老人保健施設でした。介護保

除で入所できる施設はどこも待機者が大勢いますが、開所時は、その情報が伝わっていないため、比較の入所しやすいようです。まさかの、内装業者からの情報ゲットでした。

女性は、すぐに担当のケアマネジャーに連絡。ケアマネジャーは即座に行動してくれて、両親2人の入所が決まりました。

\* \*

遠距離介護というと、親が独居の場合を想定しがちです。「両親揃っているときは、なんとかなる」といわれることも多いですが。確かにそういう側面もあるのだと思います。が、夫婦どちらかの具合が悪化するとその暮らしの歯車は、途端にくるいはじめるともいえるでしょう。

離れて暮らす子世代は、そんな親の暮らしに気付けるでしょうか。「家族」だけでなく、身近にいる「行政」や「地域」とどう連携するか。これからの日本の大きな課題だと思います。

NPO法人パオッコ

## ～離れて暮らす親のケアを考える会～

親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。そんな状況のなか、親の心身に衰えが生じると子世代はどうしたものかと悩みます。

パオッコは「ひとりの経験はきっとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有。ぜひ、ホームページに遊びにきてください!

〒113-0033 東京都文京区本郷3-37-8

本郷春木町ビル9F インキュベーションハウス内

ホームページ <http://paokko.org>